

## 第7講 プレイウース再考

ープレイウースは民主制だったのか？ー

ひとつの疑問：

プレイウースの内乱は民主派と寡頭派の権力闘争だったのか？

たたき台としてのリーガン説

Ronald P. Legon, 1967: "Phliasian Politics and Policy in the Early Fourth Century B.C.", *Historia* 16, 324-337.

ペロポネソス戦争中の政治体制

寡頭制 (Legon 1967: 325.)

前 417 年 アルゴスの寡頭派を保護 (Thuc. 5. 83. 3.)

プレイウースの寡頭派とアルキダーモス王との友情関係

(Xen. *Hell.* 5. 3. 13)

プレイウース人亡命者の存在

前 391 年 (Xen. *Hell.* 4. 4. 15.)

リーガン説：前 391 年以降 民主制 (Legon 1967: 326)

民主派と寡頭派の党争

→このリーガン説の基本構想には疑問がある。プレイウースの党争は本当に民主派對寡頭派の対立・抗争だったのか？

党争以前にどちらの党派が優勢だったかについて証拠はない

1. 380 年代のプレイウースにおいて民会が重要な決定を行っていた

(326 : Xen. *Hell.* 5. 2. 10, 3. 21) . . . . 不十分な証拠

381-379 年 スパルタ軍の包囲下での民会 (Xen. *Hell.* 5. 3. 16)

少数の亡命者の為に 5000 名以上のポリスを敵に回している

Busolt-Swoboda, i. 188 n.7; Beloch, iii. 276:5000 名という数字

はプレイウースの全成年男子市民数

プレイウース人亡命者とスパルタ人との明確な関係

(Legon 1967: 327)

Xen. *Hell.* 4. 4. 15: 「lakonismos」 故に追放された

→親スパルタ派

スパルタ人は彼らの友情を本物とみなしていた

前 391 年 スパルタ人は亡命者に同情していた

(Xen. *Hell.* 4. 4. 15: eunoikôs echontes tois phygasin)

前 384 年 エフォロス団はこれら亡命者たちをスパルタの友人と呼んでいる (Xen. *Hell.* 5. 2. 9: elegon hôs philoi men hoi phygades tei Lakedaimoniôn polei eien)

アルキダーモス王やアゲシラオス王とプレイウース人亡命者団の指導者たちとの個人的な友情関係 (Xen. *Hell.* 5. 3. 13)

コリントス戦争中の亡命者が親スパルタ派であったということ、それだけでは彼らが寡頭派であったという証拠にはならない。

(Legon 1967: 327)

亡命者が親スパルタ派で寡頭派的な政治を目指していたということとのアイデンティティーを証明するのはプレイウースの *nomoi* (法律制度) に対するスパルタの態度 (Legon 1967: 327)

前 391 年 スパルタはプレイウースの法律制度に触れなかった (Xen. *Hell.* 4. 4. 15) : このクセノフォンのコメントはプレイウースの法律制度に対してスパルタが失望していたというクセノフォンの確信を表している (Legon 1967: 327) . . . リーガンのこの主張は誇張と解釈の誤りによる、と判断

前 379 年 プレイウースの降伏 アゲシラオスによる百人委員会 (亡命者 50 名・その支持者 50 名) 新しい法律制度の構築を命じる (Legon 1967: 327-328; Xen. *Hell.* 5. 3. 25)

百人委員会による政治制度は寡頭制の設立を意味する

(Legon 1967: 328)

→百人委員会による法律改正は寡頭制の強化あるいは再編と考えられるが、寡頭制の設立と言い得るのか疑問である。

改革によって民会の広範囲な権力は弱められ、民主政は打倒された (Legon 1967: 328)

→どのような政治体制においても民会は最終的な決議

機関であった。これは寡頭派同士の対立と考えている。

前 390 年代～379 年までプレイウースの政治体制は民主政であったというのはこの間の政治状況から検証 (Legon 1967: 328)

コリントス戦争の初期にスパルタの部隊駐留の申し出を、スパルタが親スパルタ派亡命者を本国に連れ帰っているという恐れから断っている (Xen. *Hell.* 4. 4. 15)

→この亡命者が寡頭派で親スパルタ派というのは疑いが無い。しかし市内の政権を掌握している人々が民主派で反スパルタ派だというのは単純化しすぎた二項対立モデルの産物ではないのか。彼らもまた寡頭派で、亡命者とは違った意味での親スパルタ派であったという可能性は考えられないのか？

前 391 年 スパルタに部隊駐留の支援を申し出る

ディオドロスによるとプレイウースはイフィクラテスとの戦闘で 300 名の兵士を失っている

(DS. 14. 91. 3)

→現代の基準で判断すれば、1000 名の重装歩兵兵団が 300 名もの戦死者を出したということは戦闘能力の喪失を意味する。というのは戦死者以外に史料にはない重傷者も相当数いたと考えられるから。

スパルタが手をつけなかった理由 : Parke 1930: 64 「スパルタは同盟諸国を尊重して扱っていたので既存の政府を倒すことはしなかった」・・・パークはこの時期とその後の帝国の時期とのスパルタの態度の違いを対比させている

(Legon 1967: 328)

スパルタは間接的な方法で同盟諸国に影響を及ぼそうとしていたが、上手くいかない時には無理

押ししなかった (Legon 1967: 329)

「リスペクト」というよりは「便宜主義」による  
不干渉政策 (Legon 1967: 329)

↑

強力な敵と対峙している中、戦略上重要な位置に  
あるポリスをあえて敵に回す余裕はなかった

(Legon 1967: 329)

→シキュオンの前面に兵力を展開しなくて  
はならないときに、別方面に貴重な兵力を割  
くのは極めて危険だし、プレイウースがアル  
カディアやラコニアとの交通線上を扼して  
いることを考えてみればある意味妥当な判  
断である。

民主制プレイウースがペロポネソス同盟の安全  
にとって脅威であるという直接的な証拠はない

(Legon 1967: 329)

→そもそもプレイウースが民主制であった  
という確証はない。

アンタルキダスの平和が状況をすべて変えてし  
まった

不快感を覚えた同盟諸国への干渉を始める

(Legon 1967: 329)

前 384 年のプレイウース人の申し立ての検証

1. スパルタ人を市内に迎え入れなかった

スパルタの守備隊であって、個人ではなかった

(Legon 1967: 329)

2. 同盟義務を果たしていなかったのは前 394 年のこと

(Legon 1967: 329)

スパルタはこれ（聖月の休戦）を政治的マヌーバーと見なし

た (Xen. *Hell.* 5. 2. 2; Legon 1967: 330)

→ペロポネソス同盟の規約には神々にかかわる制約がある場合には、同盟国としての義務履行を免じられるので政治的マヌーバーとまで言うのか難しい。聖月による出兵規制の話は有名なマラトンの戦いの際にも伝えられている。国境越えの地震と同じように神聖な規範や神の意思に背くことは古代人にはできなかったであろう。

### 3. 寡頭派亡命者の主張は誇張されている (Legon 1967: 330)

前 391 年には自発的にスパルタの守備隊を受けいれている  
(Legon 1967: 330)

前 392 年にイフィクラテスの待ち伏せ攻撃を受けたことは、スパルタの敵によってペロポネソス同盟の成員と見なされたことを示している (Legon 1967: 330)

プレイウースはスパルタへの服属に幻滅を感じていると考えられた→イフィクラテスによる殲滅はプレイウースをスパルタ側に追いやるだけの愚行だっただろう (Legon 1967: 330)

→プレイウースが本当にスパルタとの同盟関係に幻滅していたのか？むしろイフィクラテスがプレイウースをスパルタの強力な同盟国と認識していたことの表れであり、コリントスとアルゴスとの交通線を確保し、コリントスを南側から脅かす存在であるプレイウースを無力化してしまうというのは当然の判断であった。

プレイウースがネメア以降その軍事的義務を躊躇したという証拠は全く明らかでない。 (Legon 1967: 330)

→この指摘は注目に価する

前 388 年にアゲシポリス王のもとにプレイウースで同盟軍が集結している (Xen. *Hell.* 4. 7. 3; Legon 1967: 330)

ペロポネソス軍が門前に集結しているのに自国の部隊を提供しないのは無様で危険 (Legon 1967: 331)

→事前にプレイウースに集結地であることが内示されていた可能性を考慮すべきだろう。反スパルタではなかったと考えれば、さらに南にアルゴス、北にコリントスという強大な敵対勢力に挟まれているという事情もあり、アゲシポリスとの親密な関係を考慮すれば、止むを得ず兵を提供したというよりは積極的な部分もあって然るべきだと思う。

プレイウースはアゲシポリスの遠征には貢献した

(Legon 1967: 331)

→これをどのように評価するのか？スパルタの王家同士の対立という政治文化の中でプレイウースの政権派はアーギス家のアゲシポリスとの関係を選択していたと解釈できる。

寡頭派の主張は厳密な吟味には耐えられない

(Legon 1967: 331)